

<実践報告>

教員養成課程指揮教育におけるオンライン指導の有効性に関する実践研究

吉田治人 信州大学学術研究院教育学系

The Effectiveness of Online Instruction of Conducting
in the Teacher Training Course

YOSHIDA Haruto: Institute of Education, Shinshu University

研究の目的	教員養成課程指揮教育におけるオンライン会議システム活用の有効性及び問題点を明らかにすること。
キーワード	教員養成課程 指揮法 オンライン授業 Zoom e-Learning
実践の目的	対面指導が常である指揮法の指導をオンラインで行った際に、対面指導と同様の効果が認められるのかを探る。また、対面指導を併せて行うことを通して、オンラインでの指揮指導の優位的側面、及び問題点を検証する。
実践者名	著者と同じ
対象者	信州大学教育学部音楽教育コース3年生（14名）、副免許履修生（1名）
実践期間	2020年4月～8月
実践研究の方法と経過	前年度までの対面授業で行ってきている全15回の授業カリキュラムの内、第1回～11回目までをオンライン、第12回～15回目を対面（オンライン希望者は引き続きオンライン）で行った。オンライン会議システムは、Zoomを使用した。また、例年通り、信州大学e-Learningシステム“eALPS”上でのコメントのやり取りを通して授業のフィードバックを行い、受講者のコメントから指揮に対する意識の変容を把握した。更に独自の授業アンケートを実施し、その回答結果を過去のアンケート回答と比較することで、指揮法の授業をオンラインで行うことの有効性及び問題点を検証した。
実践から得られた知見・提言	オンラインによる指揮実技指導の効果は未知数であったが、授業の進捗に伴い、学習者に対面指導と同等の指揮力向上が認められた。また、eALPSのコメント内容や、独自に実施した授業アンケートの回答から、指揮に対する概念・意識に関しても対面授業とほぼ遜色なく習得できたことが窺えた。一方で、対面授業を経験することで、その重要性・必要性も再認識することとなった。

1. はじめに

2019年12月、中国武漢市より報告された（厚労省検疫所）新型コロナウイルス（以下、コロナ）の感染は、瞬く間に日本を含む世界各国に拡散した。コロナの感染拡大に伴い、大学に対しては、文科省高等教育局長より、平成13年文部科学省告示第2号等の規定に基づき、2020年3月24日付で「テレビ会議システム等を利用した同時双方向型の遠隔授業や、オンライン教材を用いたオンデマンド型の遠隔授業を自宅等にいる学生に対して行うことは可能」との通知がなされた。

信州大学においては、同年3月31日に全学（松本市）によって発出された授業開始日の延期決定を受けて、同年4月3日に「新型コロナウイルス感染症教育学部対策チーム」が設置された。同チームによって1週間に亘り実施された教育学部教員へのZoom活用FDを経て、同年4月20日より、オンラインにて前期授業が開始された。このような状況下で、音楽教育コースにおいては、講義科目とともに開講されている声楽、ピアノ、管打楽器、指揮等の実技・演習科目のオンラインでの実施に際し、多くの対策が必要となった。筆者の担当する指揮においては、指導者と学習者による「1対1」での個人レッスンが理想的であるが、本研究の実践の場である「指揮法基礎」は、「カリキュラム上、音楽教育コースの3年生全員が履修生となるため、時間的な問題から「1対多」の形態での指導を余儀なくされる」（吉田2017）ことから、これまで実施してきた対面授業においても授業の進行には試行錯誤を強いられてきたところである。

そのような中、これらの実技科目のオンラインでの実施に関しては、この度のコロナ禍で注目されるまでは、その必然性がなかったことから、指揮教育においても、そのノウハウ、有効性、問題点について検証する研究は、まだ行われていない。

そこで本研究では、授業実践を通して、対面指導が常である指揮の指導をオンラインで行った際に、対面指導と同様の効果が認められるのかを、履修生の指揮実技の成長度合い、e-Learning上への書き込みコメント内容、アンケートによる聞き取り調査の内容から考察することを目的とする。また、対面指導を併せて行うことを通して、オンラインでの指揮指導の優位的側面、及び問題点についても明らかにする。

2. 実践の概要

本実践は、信州大学教育学部において2020年度前期月曜日第5時限に開講されている、音楽教育コースの3年生14名及び音楽科副免許取得希望履修生の3年生1名の計15名を対象にした必修科目「指揮法基礎」（全15回+補講1回）で行った。履修生全15名の内、5名は中学校・高校でのクラス合唱や部活動等での指揮経験を有し、その内2名は指揮の指導を受けた経験もあった。他の10名は全くの初心者であった。

これらの履修生を対象にした指揮指導を、初回授業から第11回目までをオンライン、第12回目から第15回目までと1回の補講を対面で実施した。尚、第12回目からの対面授業もオンライン授業希望者がいた為、引き続きオンラインも併用した。

3. 実践の内容

授業カリキュラム自体は、2017 年に行った「教員養成課程における指揮教育の手法に関する実践研究－アクティブ・ラーニングと e-Learning の活用を通して－」（吉田 2017, 以下「前研究」とする）と同内容である。

以下に、全授業内で取り組ませる指揮要素項目を示す（表 1）。

表 1 授業で取り組ませる指揮要素項目

①指揮の加減速運動と打点の感受
②拍子図形について（2 拍子，3 拍子，4 拍子，変拍子，分割）
③予備拍について（4 拍子の 1 拍目，2 拍目，3 拍目，4 拍目からの開始および，それらの裏拍からの開始，テンポ・デュナーミクを含んだ予備拍提示）
④「sf」表示の指示，及び「数取り」
⑤フェルマータ，段階的速度変化（accel., rit.）等のテンポ変化練習
⑥音量変化，キャラクター変化（marcato, legato, leggero 等）
⑦シンコペーション（裏拍の出し方）
⑧楽曲指揮実践

（吉田 2017）

授業日程及び各回で取り扱った主な演習内容，及び授業形式のオンライン・対面の区分は，以下の通りである（表 2）。

表 2 授業日程及び内容（「形式・人数欄」の OL はオンライン，数字は人数）

回	実施日	授業内の主要演習内容	形式・人数
1	4/21	・指揮の概念についての講義 ・打点感受（1 拍振り） ・拍子打ち（1・2・3・4 拍子）	OL（全員）
2	4/28	・予備拍について（4 拍子の 1 拍目，2 拍目，3 拍目，4 拍目からの開始）	OL（全員）
3	5/12	・各拍からの開始の予備拍提示の詳細説明と個人練習	OL（全員）
4	5/19	・テンポ，デュナーミクを含んだ予備拍提示（3 人練習）	OL（全員）
5	5/26	・sf の予備拍提示（ペア練習）	OL（全員）
6	6/2	・初回から第 5 回授業までの振り返り ・中間試験（これまでの課題の動画提出）	OL（全員）
7	6/9	・デュナーミク変化および各拍からの開始の要素を含んだ 8 小節のフレーズ指揮（3 人グループ練習）	OL（全員）
8	6/16	・フェルマータを含んだ 8 小節のフレーズ指揮（3 人練習）	OL（全員）
9	6/23	・分割打法とフェルマータへの入り及び抜けの関連性	OL（全員）
10	6/30	・アッチェレランドを含んだ楽曲「ロシア民謡『カリンカ』」（ペア・3 人練習） ・途中でテンポ変化する 8 小節のフレーズ指揮（ペア練習）	OL（全員）
11	7/7	・強弱，fp，デュナーミク変化＋段階的速度変化（accel., rit.）等のテンポ変化を含んだフレーズ指揮（ペア・3 人練習） ・音量変化，キャラクター変化（marcato, legato, leggero 等）を含んだ 8 小節のフレーズ指揮（ペア・3 人練習）	OL（全員）
12	7/14	・楽曲指揮 「ぶんぶんぶん」「春の小川」「ふるさと」「証城寺の狸囃子」 「山の音楽家」（4～5 人練習） ・実技試験曲指揮「帰れ，ソレントへ」（ペア・3 人練習）	対面 14・OL1
13	7/21	・実技試験曲指揮（ペア・3 人練習）	対面 13・OL2

14	7/22	※補講 ・実技試験曲指揮（4～5 人練習）を 3 コマ（各自 1 回）	対面 14・OL1
15	7/28	・実技試験曲指揮（4～5 人練習）	対面 14・OL1
16	7/31,8/3	※補講 ・実技試験曲指揮（4～5 人練習），2 日間で各自 1 回	対面 14・OL1
16	8/4	・実技試験および総括	対面 13・OL2

3.1 オンライン会議システム Zoom の活用

信州大学教育学部附属次世代型学び研究開発センター推奨のオンライン会議システム Zoom を使用し、「2019 年度までに行っていた対面授業の内容を可能な限りオンラインに移行させる」というコンセプトで、初回から第 11 回目までを実施した。Zoom の有する機能の内、以下に示す 4 点が、指揮指導に有効に活用できたものとして挙げられる。これらの内、(1)～(3)までの機能は、対面では不可能な、Zoom であるが故に可能なものであった。尚、本科目においては、学習者の指揮演習の様子を把握する必要があるので、授業中は基本的にビデオ ON 状態とした。

(1) 「ギャラリービュー／ビデオの固定」の切り替え

ギャラリービューにて出欠を確認し、前回の授業の振り返りの後、今回の各課題の説明と、必要に応じて指揮の範演を行った。範演の際には、学生側には教員画面を「ビデオの固定」にさせて、指揮実演の詳細を観察させた。指導を「1 対全員」で行う場面においては、一度に全員を見渡せるギャラリービューは、時間節約及び全員の進捗度合いの把握の観点から非常に便利であった。また、「ビデオの固定」は、特定の一個人の映像を拡大できる為、各学習者に詳細なアドバイスが必要な際に有用であった。



図 1 全員での一斉練習

(2) 画面映像による自己確認

対面授業においては自分の指揮姿は鏡や、窓ガラスに映すことで確認することが可能ではあるが、反転してしまう。自分の指揮を正しい方向から、指揮される側の視点で確認できること、また教員も学習者と同時に確認できることは、大きな利点であった。

(3) ブレイクアウトセッション

この機能は、対面授業において「筆者からの一方的な指導にならず、学生同士の自発的な学びが期待できる」（吉田 2017）小人数でのグループ練習の代替機能として非常に有用であった。アトラダムな割振りと学生の進捗度合いを反映させた教員の意図を込めたグループ割振りに変更できることも便利であった。



図 2 3人グループ練習

(4) 音声ミュート機能

音声をミュートし、教員及び学習者が行う指揮の動きだけで、指揮している課題の音楽的ニュアンスが伝わる指揮される側としての視点から判定する為に有用であった。

3.2 信州大学 e-Learning システム “eALPS” を活用した取り組み

本システムは、対面授業下で実施した前研究（吉田 2017）において、フォーラム機能による授業のフィードバック、授業内で撮影した実技動画配信等で活用したものであるが、オンライン授業下で実施した本研究においても、以下に示す新たな 2 つの側面でも非常に有効であった。

(1) 配布資料のアップロード

コロナ禍以前の対面授業においては、教室内で配布していた指揮課題プリント（追加課題含む）をデータ化し、アップロードしたものを、事前に各自でプリントアウトさせることにより、登校禁止措置下においても配布することができた。

(2) 課題動画提出

コロナ禍以前は、教員が授業内でビデオ撮影した動画をアップロードしていたが、オンライン授業下においては撮影が不可能となった。そこで、授業内で学習した課題を宿題とし、各自で動画を撮影したものを、YouTube の URL に変換し、eALPS のフォーラム上にアップロードさせることで相互視聴による復習が出来るようにした。これにより、対面授業と同様に、教員は各履修生の指揮の進捗度合いを把握することが可能となり、また履修生同士も互いの動画を視聴することで自らの指揮の参考にすることが可能となった。



図 3 eALPS 課題提出画面

3.3 対面での取り組み

授業実施教室を本来の教室（定員約 40 人）から大教室（定員約 90 人）に移し、コロナ感染予防対策を講じた上で、第 12 回目から最終授業及び 2 回の補講（計 7 回）を対面で行った。第 12 回目からの演習内容は、基礎的な技術習得から楽曲の指揮実践へと移行するところであるが、初めて履修者と対面する「初回」であることから、第 1 回目で行った指揮運動の「加減速運動」、「打点感受」等の基本運動を復習した。



図 4 対面授業での一斉練習

4. 授業アンケート

2020 年度「指揮法基礎」履修者 15 名を対象に、筆者独自の授業アンケート調査を行った（8 月実施）。設問内容及び回答（抜粋）は以下に示すとおりである。対面授業での前研究（吉田 2017）のアンケートと重複する設問は、両年の回答内容（抜粋）を併記した。

Q1 この授業で取り組んできた課題を習得できたと思いますか？
【2017】・そう思う：4(25%) ・まあまあそう思う：12(75%) ・どちらでもない：0 ・あまりそう思わない：0 ・まったくそう思わない：0
【2020】・そう思う：5(33%) ・まあまあそう思う：9(60%) ・あまりそう思わない：1(7%) ・まったくそう思わない：0 ※2020年度は「どちらでもない」の項を削除した
Q2 比較的習得できたと思う課題を挙げて下さい。(自由記述)
【2017】・指揮の基礎、基本的な形、拍子図形、分割、拍の取り方 ・一拍前に次の表現の指示を出すということ ・様々な要素を含んだ指揮 ・指揮をするということは、自分の中の思いがあることが前提であり、 それが意思を持って指揮できるということ
【2020】・指揮の基礎的な理論の理解 ・指揮運動について理解し、打点の意識や図形の形など基本的な点 ・予備拍で強弱や表現を示して伝えること ・予備拍練習、フェルマータ練習、速度変化練習など ・その音楽を感じながら指揮をすること ・指揮は、ただ指揮の形を振ればよいのではなく、歌やピアノを演奏するときと同じように、自分の感じている音楽的なものが表出して指揮になると身をもって分かった
Q3 まだ不十分だと思う課題を挙げて下さい。(自由記述)
【2017】・打点をぶれないように指揮を振ること ・音楽を感じること、表現力 ・テンポ表記が変わった時の振りの変化 ・マルカート、テヌート、スタッカートの違い ・指揮で曲の雰囲気・ニュアンスを指揮に反映できない ・単調な指揮になってしまう ・歌詞の内容と対応した指揮が、自分の指揮ではまだ表現しきれしていない
【2020】・指揮を振ることに一生懸命になりがちで、曲そのものにまだ全力で入り込めない ・適切な指揮運動(打点の加減速の動きなど) ・曲のニュアンスによる指揮運動のニュアンスの変化 ・歌う人とコンタクトを取りながら振ること ・音楽にあった指揮をすること ・自分がイメージする音楽を指揮することを通して体現すること
Q4 取り扱ってほしかったと思う内容があれば記入してください。(自由記述)
【2017】・拍を取らない左手をどううまく使うか、知れると良かった ・授業の時数的に厳しいかもしれませんが、もう少し実際の曲を題材として課題を行う機会があると良かった ・オーケストラの振り方をもっと学びたかった
【2020】・講義内容に満足です ・左手の使い方などについてももう少し詳しく学べるとよかった ・レガート且つ指揮運動のある振り方について、もう少し詳しくやってみたかった ・このような情勢下で対面授業を実施してくださったことに本当に感謝しています
Q5 オンライン授業での学習で、指揮の基礎は学べたと思いますか？ (2017年度は対面授業)
【2017】・そう思う：13(81%) ・まあまあそう思う：2(13%) ・どちらでもない：1(6%) ・あまりそう思わない：0 ・まったくそう思わない：0
【2020】・そう思う：6(40%) ・まあまあそう思う：8(53%) ・あまりそう思わない：1(7%) ・まったくそう思わない：0 ※2020年度は「どちらでもない」の項を設定しなかった
Q6 ブレイクアウトセッション2人練習の効果的側面
・お互いに評価しあうことによって、自分自身の技術面の見直しにつながると感じた ・自分が指揮している姿も見れるので、アドバイスされたところが改善しやすい ・画面を大きくできるので、相手の細かい部分まで指揮の様子が分かる
Q7 ブレイクアウトセッション2人練習の非効果的側面
・相手の歌っている様子がわからないので、自分の中にある音楽が相手に伝わっているかどうか分からない ・実際の指揮のラグを感じることができなかった ・タイムラグが生じてしまうので、自分の指揮で歌ってもらえない ・画面越しに振っているのでもうしても、相手に振っている感がない ・通信状況によって指揮が止まって見えたり、声が届かなかったりした
Q8 ブレイクアウトセッション3人練習の効果的側面
・3人でのセッションは、2人の時に比べて意見をもらえる人数が多くなるので勉強になった ・3人という人数も、多すぎず少なすぎずちょうど良かったように思う ・2人の時よりは相手に振っている感がある。 ・少なくとも二つの視点から意見をもらえる ・1人の指揮に対して、2人の意見・感想が得られるので、多角的で客観的な意見が得られる ・相手2人と自分の指揮を比べたり、幅広い意見が期待できる ・客観的に、指揮をしている人を見ることができた。 自分によいところを生かそうとすることができた ・見る人によって違う観点から指導をしてもらえるのでとても為になったし、改善点も様々なので、楽しかった

Q9 ブレイクアウトセッション3人練習の非効果的側面	
<ul style="list-style-type: none"> ・一人一人に与えられる時間が二人の時より短くなってしまふ ・自分の指揮を見ている2人に全く逆の意見を言われた時は困った ・自分の指揮で歌ってもらえないので、自分の指揮によって音楽がどうなっているのかが分からない ・少し映像が乱れることがあり、それでアドバイスがうまく伝わらないことがあった。 	
Q10 対面授業とオンライン授業での学習において、違いを感じましたか？	
・とても感じた：10(67%) ・少し感じた：5(33%) ・あまり感じなかった：0 ・まったく感じなかった：0	
Q11 「とても感じた」「少し感じた」と回答した人に伺います。どのような違いを感じましたか？	
<ul style="list-style-type: none"> ・実際に先生に指揮運動の基礎をもう一度教わったときに、自分が思っていた重さのかけ方と違ったりスピード感の違いがあることに気付いたり、対面じゃなきゃ分からないことがあったと思った ・オンラインは形はみえるが、細かいところが見にくい。対面だと表情やどう音楽を感じているか身体から滲み出ているから、オンラインでは分からない音楽性や緊張感を感じることが出来た ・指揮の動きがコマ送りではなく、鮮明に見えているので、より伝えたいことが動きとして見える ・ピアノの伴奏と合わせるのが、オンラインでは時間差があるのでとても難しかった ・自分の指揮で歌ってもらえるので、自分の指揮の振り方によって音楽がどのようになるのかが分かり、改善点が見えやすい ・やはり、オンラインだと打点の感じや指揮運動についての動きが理解するのに限界があるように感じるので、直接指導を受けて感覚が理解できた部分は大きかったと思う ・オンラインと違って、打点を実際に体感したり、実際に歌と対峙してみてもレスポンスを実感することができた ・自分の動きを動画に撮ってもらえるので、自分の復習に役立てることができる。 	
Q12 対面授業での2人対面練習の非効果的側面	
<ul style="list-style-type: none"> ・相手の指揮について、改善できる点に気づけないときに、その相手はそこで学べるものがないということ ・全員が同じ部屋にいますので、オンラインよりは気が散りやすい ・あまり思い浮かばないけれど、強いてあげるのなら、指揮は一人に向かって振るということはありませんので、全体に向けて指揮を振る感覚が2人だとあまりなかった。(でも、オンラインの時よりは全然よかった) 	
Q13 対面授業であなたが行った人3名以上での対面練習は、何人ですか？	※3名が最大人数となったので、Q13～Q15の回答は省略
Q14 対面授業であなたが行った人数での対面練習の効果的側面	
Q15 対面授業であなたが行った人数での対面練習の非効果的側面	
Q16 本授業においては、対面授業は必要不可欠であると思いますか？	
・そう思う：13(87%) ・まあまあそう思う：2(13%) ・あまりそう思わない：0 ・まったくそう思わない：0	
Q17 その理由を挙げてください。	
<ul style="list-style-type: none"> ・先生の見本を見る時も、オンラインでは分からない音楽的な部分が空気感で滲み出ている ・対面で感じられる音楽性を知らないまま現場にでると形ばかりの指揮になってしまいうるから ・曲も伴奏・歌と実際に合わせができ、自分の指揮がどのように伝わっているのかも分かりやすい ・ピアノ伴奏をつけての指揮はタイムラグが発生してはどうにもならない。対面で指揮を見ながら弾いてもらうことが確実であると感じる。 ・パソコンに向かって指揮をすると、実際に人前で指揮するのは、緊張の面でも、音楽の面でも感覚が全く違うから ・実際に歌い手やピアノと対峙することで、ただの運動としてでなく、より音楽的な指揮ができるようになると思う。 	
Q18 教員が作成した授業後のフォーラム記事掲載および履修者自身の書き込みは、自らの学びに役立っていると思いますか？	
・そう思う：10(67%) ・まあまあそう思う：5(33%) ・あまりそう思わない：0 ・まったくそう思わない：0	
Q19 対面授業内での指揮演習の撮影動画配信は自らの学びに役立っていると思いますか？	
・そう思う：11(73%) ・まあまあそう思う：4(27%) ・あまりそう思わない：0 ・まったくそう思わない：0	
Q20 撮影動画配信の効果的側面があれば記入して下さい。	
<ul style="list-style-type: none"> ・自分の指揮している姿を客観的に見ることができ、自分の改善点を見ることができる。ただ言われるだけではわかりにくい指揮の癖も見ることができる ・何度でも見直しができる ・自分の姿を客観視できるのと他の人たちの指揮を見て自分の学びに生かすことができる 	
Q21 一週間のピアノ練習時間、	Q22 一週間の声楽練習時間、
Q23 一週間の指揮練習時間	

<p>(※丸数字は学生ナンバリング、数字はピアノ/声楽/指揮の一週間の練習時間：単位は分)</p> <p>①120/120/60, ②630/150/100, ③240/180/30, ④950/160/100, ⑤840/420/210, ⑥25/20/20, ⑦360/240/150, ⑧210/120/90, ⑨420/0/90, ⑩420/0/90, ⑪300/180/140, ⑫420/210/100, ⑬420/200/120, ⑭420/240/100, ⑮240/90/60 (ピアノ平均: 401, 声楽平均: 175, 指揮平均: 100)</p>
<p>Q24 この授業を受けてきて、あなたが出来るようになったことや学んだことを書いて下さい。</p>
<p>【2017】・今まで指揮の形にばかりとらわれていたが、それよりも自分がどのような音楽にしたいかが大切で、そのイメージがないとよい指揮にはなりえないことに気づいた ・基本的な指揮の振り方</p> <ul style="list-style-type: none"> ・指揮はただ手を振るだけでなく、楽器や歌と同じように技術が必要であること ・曲の雰囲気や振り方や表情で表現すること ・より歌い手や奏者のことを考えて振るようになった ・楽譜に書いてあることを表現しようとすることも大事だが指揮者がどういう音楽を描いているかで自然と指揮に表われてくることを学んだ ・少し自信をもって指揮をすることができるようになった
<p>【2020】・ただ手を振れば出来るのではなく、どの奏者よりも音楽を深く理解し、掘り下げ、表現を先導する非常に重要な立場だと学んだ ・基本的な指揮運動や音楽に応じて振り分ける、といったこと</p> <ul style="list-style-type: none"> ・曲全体をみてどういう風に演奏したいか考えながら振ることが出来るようになった ・指揮の基本的な動作や指揮の役割を学ぶことができた。また、ピアノ・声楽同様、自分の中に音楽がしっかりと定まらなければならないということを学んだ ・最低限の指揮は振れるようになってきて嬉しい ・基本的な指揮の振り方を習得し、ただ振るのではなく、楽曲分析をして「表現」をしながら振ることができるようになった ・指揮の基本的な手順のみではなく、奏者を促す予備拍や指揮の提示、音楽のニュアンスを指揮によって表出するということが指揮において大切であることを理解し、初めのころと比べるとそういった指揮が出来るようになってきたのではないかと思います。 ・今まで、手を動かす指揮というイメージが強かったが、心からあふれる音楽表現としての指揮であるという学びが一番大きい ・合唱や吹奏楽で指揮をされる側だったが、指揮を振ることでいつもとは違った視点で楽曲の分析であったり曲想を感じることができた。また、他のさまざまな音楽的要素との関連もあったためそれも新たな学びへと繋がった。

5. 分析

5.1 授業内容習得に関する設問 (Q1～4)

Q1の「習得度合い」の実感については、2017年度100%、2020年度93%と肯定的な回答をしている。Q2の「習得できた課題」に関しては、指揮技術の基礎的事柄に加え、「指揮はただ指揮の形を振ればよいのではなく、歌やピアノを演奏するときと同じように、自分の感じている音楽的なものが表出して指揮になる」という概念的な部分も両年度に共通して表れている。一方で、Q3の「不十分」と感じていることに「音楽的ニュアンスを反映・表現できない」との回答があることも共通している。Q4の「取り扱ってほしかった内容」として「左手の使い方」を両年とも挙げていることは、今後授業内容の検討を必要とする部分である。

5.2 オンライン授業に関する設問 (Q5～9)

Q5の「オンライン授業で指揮の基礎は学べたか」との問いには、2017年度の対面授業と同様に「そう思う」(13)、「まあまあそう思う」(2)と、ほぼ全員が肯定的な回答をした。Q6～9のブレイクアウトセッションに関する問いには、学習者同士の相互指導の利点を挙げる一方で、オンラインの欠点に対する指摘が多く見られた。この欠点は、指揮映像がスムーズに流れずコマ送り状態になるという通信状況に関することと、これによって生じる指揮と奏者・唱者間のタイムラグである。このタイムラグは、指揮によって演奏・歌唱が奏でられるという、指揮において最重要ともいえる部分の学びを不可能にしてしまう“致命的”な欠点といえる。

5.3 対面授業に関する設問 (Q10～20)

Q10 の「対面授業とオンライン授業での学びの違いの有無」については、「とても感じた」(10)、「少し感じた」(5)と全員が「ある」と回答をした。Q11 に対する「違い」の主な内容としては、対面ならではの緊張感、タイムラグなしにリアルタイムで自分の指揮で相手が歌ってくれること、等を「体感できる」ことが挙げられており、対面授業の優位性が表れている。

また、Q16 で対面授業の必要性を問うたところ、「そう思う」(13)、「まあまあそう思う」(2)と、こちらも全員が肯定的な回答をした。その理由 (Q17) として、「実際に歌い手やピアノと対峙することで、ただの運動としてでなく、より音楽的な指揮ができるようになると思う」という回答があるが、この回答から「この授業は、単に指揮技術習得の為のみならず、自己の指揮によって演奏を、より音楽的に向上させていけるようになる為の学びを求めている」ということが認識できていることが窺える。これは、筆者の最も重要とするポイントである。

5.4 信州大学 e-Learning システム “eALPS” の活用に関する設問 (Q18～20)

Q18 の「フォーラム書き込みの有用性」に関する問い、Q19 の「撮影動画配信の有用性」に関する問いには、2017 年度と同様に、いずれも全員が肯定的な回答をしている。撮影動画配信の有用性に関して、「自分の姿を客観視できる」ことを多くの学習者が挙げていることも共通している。オンライン授業での“eALPS”の活用は、初回から一貫して活用しているが、授業形態にかかわらず、その有効性は非常に大きいといえる。

5.5 ピアノ・声楽・指揮の一週間の練習時間 (Q21～23)

これら設問は、授業形態には影響されないが、教育学部の音楽科生の 3 つの実技科目に対する重要度の認識が窺えるものである。2020 年度は、ピアノ平均:401 分、声楽平均:175 分、指揮平均 100 分、また 2017 年度においては、ピアノ平均 263 分、声楽平均 170 分、指揮平均 48 分との回答があった。ここで分かることは、ピアノ>声楽>指揮という優先順位である。指揮は、腕さえ動けば「何とかなる」ものだという認識になりやすいが、Q3 「まだ不十分」なこととして挙げている「指揮で曲の雰囲気・ニュアンスを指揮に反映できない」ことを向上させるには、対面授業、オンライン授業に関係なく、ピアノ・声楽と同様に練習時間を積み重ねることが、何を置いても重要である。

5.6 授業を通しての学び (Q24)

全授業を通して得た学びについての問いである。対面でのみ行った 2017 年度と同様に「最低限の指揮が振れるようになってうれしい」との回答が見られた。指揮の基本的技術の習得と併せて、「自分の中に音楽がしっかりなければならないということを学んだ」ことは、本実践の本質ともいうべき事柄であり、指揮が単なる筋肉運動ではなく、指揮者に楽曲の有する音楽的イメージ・ニュアンスを深く感受することで初めて音楽活動としての「指揮」になるのだという認識が宿ったことが窺える。

6. 考察

指揮教育においては対面指導が当たり前で、オンライン指導と比較すること自体、無意味であることは自明の理である。本研究は、それを踏まえた上で、オンライン指導の有効性を探ったものであった。授業半ばで、eALPS のフォーラムに以下のような書き込みが見られたが、この内容は、オンライン授業の有効性を示唆しているものであるといえる。

指揮は、音楽を感じたうえで、動きが自然になってしまうというところや、打点の打つ感じは無限にあり、自分の思い通りに変わっていく、ということを目指してやっていきたいと思った。自分の指揮がどうなっているのか、ビデオを通して見る、と述べられたことについては、今年の場合はコロナの影響でリモート授業になってしまったが、Zoom では自分の姿も先生の姿も友達の姿も、全てパソコンの画面で確認することができ、先生の指揮を見て自分の指揮の良くないところを見つけたり、友達の指揮を見て自分の指揮で新たに発見することがあったりと、充実して学ぶことができていると感じた。また、「分かりやすい」指揮とは、交通整理のような理路整然とした動きではなく、「指揮者がどのような音楽を出してほしいかが『分かりやすい』」ということなのだ改めて知った。自分が音楽を感じているのは大前提だが、授業において3人グループで練習する際に、まさに「自分では意識してやっているつもりなのに、必要な表現が出ていない」ということに、友達の指摘によって気づいた。先生に何度も言われていることであるが、歌を歌うときやピアノを弾くときに持っている音楽を感じるということは、指揮をするときも変わらず、声で歌う代わりに、手で歌うことが大切なのだと改めて学んだ。

対面指導が前提である指揮指導をオンラインで行うという発想は、コロナ禍に直面するまで、少なくとも筆者にはなかった。指揮運動の有する「加減速運動」や「打点感受」等の感覚的な事柄の伝授の可能性を始め、そもそも授業として成立するのかという根本的な疑問を有した上での実践であったが、実技試験における指揮実演や、アンケート回答の内容から、履修者の指揮実技、指揮に対しての意識的な成長は、筆者の想像を超えていたといえる。

オンラインが故に発生するシステムの欠陥、課題も浮き彫りになったが、今回のコロナ禍により余儀なくされたオンラインによる指揮指導は、今後、対面授業に戻った後にも、何らかの事情で登校できない受講生にオンラインで参加させたり、教員の事情で休講とせざるを得ない状況においてオンラインで授業を実施したりする等、補助的に使用できる可能性が窺えたことは、一つの、しかも大きな「収穫」といえると思う。

このコロナ禍における指揮指導授業は、一昔前なら「何もできない」状態で手をこまねき、授業そのものを休講とせざるを得なかったことであったであろう。「新型コロナウイルス感染症教育学部対策チーム」の方々のご尽力により実施可能となったオンラインでの指揮指導は、「やらないよりまし」をはるかに凌駕した、実りある成果をもたらしたと確信する。

文献

吉田治人, 2017, 教職課程における指揮教育の手法に関する実践研究—アクティブ・ラーニングと e-Learning の活用を通して—, 信州大学教育学部附属次世代型学び研究開発センター紀要「教育実践研究」, No.16, pp.49-58

(2020 年 9 月 25 日 受付)